

# キンシヨキシヨキ

豊島与志雄

青空文庫



今のように世の中が開けていないずっと昔のことです。ある片田舎の村に、ひよっこり一匹の猿がやって来ました。非常に大きな年とつた猿で、背中に赤い布をつけ、首に鈴をつけて、手に小さな風呂敷包みを下げていました。

村の広場で遊んでいた子供達は、その不思議な猿を見付けて、大騒ぎを始めました。けれども猿は平気な顔付で、別に人を恐がるふうもなく、わいわい騒ぎ立てる子供達を後にしたがえて、蔵のある大きな家の前へやってゆきました。そして、その庭のまん中で、首の鈴をチリンチリン鳴らしながら、後足で立ち上がっておかしな踊りを始めました。

子供達はびっくりして、猿のまわりを円く取り囲んで、黙ってその踊を眺めました。踊が一つすむと、みんな夢中になって手を叩いてはやし立てました。すると、猿はまた別な踊を始めました。

蔵のある家の人達は、表の庭が騒々しいので、不思議に思っ出て来ました。見ると、大勢の子供達のまん中で、赤い布と鈴とをつけた大きな猿が、変な踊をおどっています。

「おや、不思議な猿ですねえ。どこの猿ですか」と家の人はたずねました。けれど子供達も、どこから来たどういう猿だか、少しも知りませんでした。

そのうちに、猿は踊をすましました。そして、風呂敷包みからお米を一つかみ取り出して、片方の手でそれを指さしながら、しきりに頭を下げています。「お米を下さい」と言っているようなようです。

家の人はそれを悟さとつて、米を少し持つて来てやりました。猿は風呂敷を広げてそれをもらい取ると、何度も嬉うれしそうにお辞儀じぎをしました。それから、また別な家の方へやって行きました。子供達はおもしろがついてついでに行きました。

次の家でも、猿は同じことをして、お米をもらいました。そういうふうにして、何軒なんげんか廻つて風呂敷にいっぱい米がたまると、猿はそれを抱えて、一散いっさんに走り出しました。子供達も後を追っかけましたが、猿の足の早いので早くないので、またたくうちにどこへ行つたか見えなくなつてしまいました。

不思議な猿の噂は、たちまち村中の評判になりました。

「どこから来たんだろう。……どうしたんだろう。……何だろう。……不思議だな」  
 けれど誰一人としてその猿を知ってる者はありませんでした。

ところが、その翌日になると、またひよつこりとその猿がやって来ました。やはり赤い布と鈴とをつけ、小さな風呂敷包みを持っていました。そして村の家の前で踊ってみせました。がこんどは、風呂敷から野菜の切端を取り出して、それをくれと言うようなんです。村の人達は前日の噂でもうよく心得ていますので、大根だのごぼうだの芋だのいろんな野菜をやりました。猿はそういうものを風呂敷いっぱいもらいためると、また一散にどこへともなく逃げ失せてしまいました。

さあ村中の噂はますます高くなりました。けれどやはりどういふ猿だか知ってる者はありませんでした。

すると、猿をちらと見たという村の老人の一人が、こんなことを言い出しました。

「あれは猿爺さんの猿じゃないかな」

それを聞いて、他の老人達も言いました。

「なるほど、猿爺さんの猿にちがいない」

そこで、あの猿は猿爺さんの猿だろうということになりましたが、村の若い人達は、その猿爺さんのことをあまりよくは知りませんでした。で老人達はくわしく話してきかせました。

猿爺さんというのは、五年に一度くらいずつ村に廻ってくる、田舎廻りの猿使いの爺さんでした。長い髪の毛胸に垂れてる髭も、昔からまっ白であつて、日に焼けた額には深い皺がよつていて、幾つになるのか年齢のほどもわかりませんが、方々の国で様々なものを見てきて、人の知らない不思議なことを知っている、妙な人だそうでした。そして、この爺さんの連れてる猿がまた、非常に大きな年とつた猿で、いつも背中に赤い布をつけ首に鈴をつけて、爺さんと友達のように並んで歩いていて、爺さんの言葉は何でもよく聞き分けるのだそうでした。

そしてこの二人は、爺さんがいろんな歌をうたいそれにつれて猿がおかしな踊をおどり、方々の家でお金やお米などを少しづつもらつて、はてしもない旅を続けてるのでした。大きな町や都会をきらつて、田舎の方ばかりを廻つていたのでした。都会よりも田舎の方が、のんびりとして気持ちもよく、お金もかからないというのです。宿屋がないような辺鄙なところへ行くと、雨の降る間は幾日も神社の中に泊つていたり、天気の日には木影に野

宿くしたりしました。下にござを敷き上に毛布をかけて、爺さんと猿とは一緒に寝ました。そのござと毛布との外に、小さな桶おけと鍋なべとを持っていて、自分で御飯をたいて食べるのでした。

## 三

さて、猿爺さんの猿が村へ物をもらいに来たとすれば、猿爺さんも村の近くに来てるに違いありません。そして、猿爺さんはきつと病氣かなんかで動けなくて、猿が一人でやって来るのに違いありません。

「このままほつたらかしてもおけまい」

そう言つて村の人達は、猿爺さんの居さかどころを探し始めました。けれどもなかなか見付かりませんでした。それにまた猿の方でも、風呂敷ふろしきにいっぱい米と野菜とをもらつていたためか、それきり姿を見せませんでした。

「困つたものだな」と村人達は言いました。

そして、中一日おいた次の日の夕方です。村の若者が一人、やはり猿爺ざるじいさんの居さかどこ

ろを探しめぐんで、村から半里ばかりある丘のふもとを通っていますと、どこからか、キンシヨキシヨキ、キンシヨキシヨキ……という気持ちのいい音が聞こえてきました。

「おや」

若者はびつくりして立ち止まりました。するとやはり、キンシヨキシヨキ、キンシヨキシヨキ……と、今まで聞いたこともない不思議な音が響いてきます。若者はその音に聞きとれて、ぼんやりその方へ進んでゆきますと、まあどうでしょう。

丘のふもとの、こんもりと杉の木が五六本茂つてるところに、美しい水がふつふつと湧き出しています。そしてその側で、赤い布と鈴とをつけた大きな猿が、桶おけでせつせと米をといでいます。その音が、キンシヨキシヨキ、キンシヨキシヨキ……と、不思議な音楽のように響いています。なおよく見ると、杉の木の下には、髪の毛ひげもまつ白な爺さんが、毛布にくるまってごぎの上に寝ています。

若者はあつげにとられました。やがて我に返つてみると、それこそまさしく、老人達から聞いた猿爺さんとその猿とに違いありませんでした。

「そうだ、そうだ」

若者は嬉うれしくなつて、爺さんのところへ走つて行きました。



「猿爺さんじゃありませんか」

爺さんは、にっこり笑って若者を迎えました。

「とうとう見付かったかな。……猿めがあんたの村でいかいお世話せわになったそうで……」  
 そこで若者は、村中大騒ぎをして爺さんじいを探してることや、病気なら村に来て養生ようじようするがいいということなどを、熱心に言い立てました。

爺さんは頭を振って答えました。

「いや、この上あんたの村の人達に世話せわをかけてはすまん。それに、ここにこうして寝ている方が、結局わしには気楽だからのう。……まあちよつと、あの泉の水を飲んでみなさ  
 れ」

そこで若者は、何の気もなく泉の水を一掬すくいして飲んでみますと、びっくりして眼を白黒させました。おいしいの何のつて、蜜みつと氷砂糖こおりさとうと雪とをまぜたようなたまらない味でした。

「わしがここまで来かかるとな」と爺さんは話してきかせました。

「急に病気で動けなくなってしまうたのさ。そこで杉の木の下に寝たがのう、喉のどが渴かわいて仕方しかたないから、猿さるめに水がほしいと言うとな、猿めがいきなりそこを掘り始めた。何する

のかと思つていたら、その掘つた穴から、あの通りうまい水が湧き出してきた。これはわしの知恵にも及ばんことで、ほとほと感心させられましたわい。……そこで、わしはその水を飲んでいくらか気持ちがよくなつたがなあ、次にはお米がないという始末なんさ。で猿めを一人であんたの村にやつて、お米や野菜をもらつて来させたんだがなあ、お影かげで助かりました。もうわしの病氣もあらかたよくなつたで、心配して下さらんでもよい。そう村の衆しゆうへも言つて下されよ」

若者は爺さんの心を動かすことが出来ないのを見て取つて、村へ歸つてゆきました。歸る時にはもう猿は米をといでしまつて、それを鍋なべに移してたき火で煮ていました。そして若者の方へ、真面目まじめくさつた顔かおつき付でお辞儀じぎをしました。

## 四

若者が猿ざる爺じいさんに逢つた話をしますと、村の人達はなぜかしらひどく感心しました。そして翌朝になると、半なかば親切めいずらから、半なかば物もの珍めずらしきから、いろんなものを持つていつてやりました。米や野菜や布ふ団とんなどはもちろんのこと、病氣びやうきに利きくというほととぎすの黒く

焼ろやきやうなぎの肝きもなど、めいめい何かしら見舞の品を持っていきましました。そして泉の水を一杯ずつ飲ませてもらって、そのうまい味に驚きました。夕方行った者は、キンシヨキシヨキ、キンシヨキシヨキ……と猿が米をとぐ美しい音に驚きました。

そして猿爺さんの病気は、猿の介抱かいほうと村人達との世話せわとで、間もなくなおってしましました。

病気がなおると、爺さんは猿を連れて村へ御礼に来ましました。村の人達も大変喜びました。その晩は、村の広場で酒盛りをしました。村中の人達が寄り集まって、歌うやら踊るやら大騒ぎでした。猿爺さんも猿もまつ赤に酔っぱらって、爺さんは他国のへんてこな歌をうたい、それにつれて猿は首の鈴をチリンチリン鳴らしながら、おかしな踊をしてみせました。子供達ばかりでなく大人わとなまでも、そのおもしろさに浮かれ騒ぎました。

そのうちに、酒盛りももう終りになって、夜が更ふけてきましたから、村の人達は爺さんと猿とを、どこかの家へ泊めようと言ひ出しました。けれど爺さんは首を振って、その広場に野宿のじゆくすると言つてききません。

「家の中よりは、広々とした野天のてんに寝る方が気楽でよいからのう」  
と爺じいさんは言いました。「それから、村の衆しゆうへ御礼のしるしに、あの丘のふもとのうまい

泉はあのまま残しておいてあげるから、大事にして下されよ」

「ありがとう。……ではまた明日逢いましょう」

そういつて村人達は一人ずつ、爺さんと猿とに別れを告げて、家の中へ引き取りました。そして翌朝早く、村人達はまた広場へやって来ました。ところがもう爺さんと猿とは、影も形も見えませんでした。夜の明けないうちにどこかへ出かけてしまったのでした。名<sup>な</sup>残<sup>ごり</sup>惜<sup>お</sup>しいけれど仕方<sup>しかた</sup>がありませんので、村人達はせめてもの心やりに、丘のふもとへ行つてみました。するとやはり猿爺さんが約束した通りに、澄みきった冷たい水が湧<sup>わ</sup>き出して、蜜<sup>みつ</sup>と氷砂糖<sup>こおりざとう</sup>と雪とを交まぜたような、何とも言えないおいしい味でした。

それからというものは、村の人達はそれをわざわざ汲<sup>く</sup>みにいたり、野<sup>の</sup>良<sup>ら</sup>の行き帰りに廻り道をして飲みにもいたりしました。泉のおいしい水は、いつもふつふつと湧き出していました。静かな日の夕方なんかには、キンシヨキシヨキ、キンシヨキシヨキ……と、美しい音がどこにもなくその辺に聞こえたそうです。





# 青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社

1990（平成2）年11月27日第1刷発行

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2006年4月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# キンシヨキシヨキ

豊島与志雄

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>